

1. 目的

ここでは、ポートランドの自治体であるメトロとのクラカマスカウンティアーのアーバングリーンのパートナーシップ、そしてエリア内のライトレールトランジットセンターに関する計画、デザインと建設に近隣市民を巻き込むための、補助金の使い方の工夫が紹介を共同創設者であるジャンガー・チップス氏より説明していただきました。

2. 内容

(1) クラカマスカウンティアーにMAXが来るで、アーバングリーン登場

2008年に、クラカマスカウンティアーにMAXがPSUからオークグローブまで来ることが決まった。費用はクラカマスカウンティアーまで引くのにかかる2億ドル。このMAXの計画、クラカマスカウンティアーでは、ミルウォーキーとオークグローブに駅を作ることがミッション。クラカマスカウンティアーでは、コミッショナーが2500万ドルの支出を決定したが、住民には、新しいオレゴンを良しとは思わない、昔から住んでいる人が多く、そのため、クラカマスカウンティアーがお金を出すのはおかしいという団体も出てきた。反対派の声が出ていることから、TRIMET、METROがアーバングリーンに来て手助けしてくれるよう求めてきた。

(2) 市民を巻き込む ～我慢しながら、少しずつ少しずつ～

アーバングリーンは小さなグループだが、METROとは以前から良い関係を築いており、ライトレールの駅は駐車場に建てることになるが、町の劣化を防ぐことができれば協力するとし、協力した。アーバングリーンは、まず、シャレットという小さな集会を何回も実施。そのシャレットには影響を受けるすべての人を呼んだ。さらに住んでいる人に「何かしたいことがあれば集めてきてほしい」と説明するとともに、自分たちから歩み寄り話しかけるようにした。

こういう小さな積み重ねの結果、地域が一つとなっていくのだが、これは、住民を信じ、コミュニティーの人が集まって出てくるいろいろなアイデアもつまらないものはないというスタンスをもち、また突拍子もない話も差別せず、良いアイデアが浮かんでくるものと割り切り、声を聞き、意見が出し続けてもらえるようにした、今では大きなコミュニティーとなっているようで、これは、我慢の産物であると言えよう。

(3) アイデアはすべて住民のもの

次に、良いアイデアが出たら磨きをかけていく。あくまでもアーバングリーンは方向性がずれないように見張るだけで、提案をして意見決定したのではない。ただ、そうはいってもただ受け身ではなく、コミュニティーの一員として、良いアイデアが出ればプッシュもするし、場合によってはコミュニティーが良いと言え、アーバングリーンで実行に移すということもあるそうだ。

結果、「降りるとそこは森」という駅の特徴、ミーティング、音楽を楽しむ。芸術も楽しむというデザインコンセプト、ポートランドの人にも、駅の両脇のバイクトレイルでオークグローブコミュニティーを楽しんでもらったりする工夫など、たくさんのアイデアはすべて住民から出たアイデア。参加する気がないような人でも参加してくれたとのこと。自分た

ちの意見が反映される充実感が積み重なって、このような素晴らしい計画になったのではないだろうか。

3. チップスが伝えてくれたこと

■可能性を探り、関心をかきたて、実現することの楽しさを感じる

どんなことに力を注いだらいいか、決断する人と仕事できるか、などアーバングリーンのメンバーは様々な経験を持っているという話の中での言葉。話の途中途中で、チップスが思い出すように笑う顔が忘れられない。やる人が楽しくなくては…ということは、自分も事業を進めるうえで先輩から良く聞いた言葉だったが、それだけでなく、参加者も楽しんでもらうために様々な工夫をする姿勢、大切なことを教えて頂けた素敵な時間でした。